出会い　ふれあい　助け合い

サロン・あべの

<サロン・あべの>NO．16　昭和62年10月17日（土）発行

結婚 その生活（聴覚障害者を中心にして）

九月の出会い

秋空が広がり、さわやかな土曜日の午後<サロン・あべの>は、新婚生活三ヶ月目の辻田夫人と辻田さんの友人上野さんを迎えて、聴覚障害者としての生活について話を伺った。

上野さん夫妻は、辻田さん夫妻同様聴覚障害者で、結婚して八年。六才と四才の女の子の母でもある経験豊富な生活ベテラン者。

新旧相交えてのお二人の生活について、話は出席者二十四名各々の思いを重ねて、障害者の結婚生活について考えさせられもし、大いに参考にもなった。

○日常の生活

聴覚障害者の場合、個人的な生活活動は気を付けていれば、さほど大きな失敗はない。ガスモレの場合は、鼻で知ることができるし、風呂の水入れは、何回も見に行けばよい。きちんとした生活をし、気働き、それなりの気くばりをしっかりすることが大切。

近所付き合いは、子供が出来てから子供を介してスムースになっていく。ちょっとしたあいさつから、ふれあいが生まれ仲良くなっていける。そこから一歩進んだ「つきあい」は、お互いの歩みよりから信頼関

入賞　おめでとう

府社協　福祉広報紙コンクール
優良賞受賞

大阪府社協主催の第十五回福祉広報紙コンクールに、府下の社協・福祉関係団体から八十四紙の応募があり、その中で本紙（サロン・あべの）が優良賞に選ばれました。この受賞式が九月二十一日に森の宮の府立青少年会館で行われ、石田・冨田の両氏が出席しました。（7・8・9面に関係記事）

係が生まれ、一般の健全者とも手話なしでゼスチャー等で通じあえるようになる。

また、上野さんのように生まれ育ったところに生活する人の場合、自然とおとしよりとのおつきあいも多く、手話も時代とともにちがってきて通じないときもまゝあるが、そんなにコミュニケーションに支障をきたさないで生活している。とのこと

○買い物

近所の顔なじみの人と行く。よしんば一人で行っても慣れた店だとゼスチャーで通じる。スーパーなどでの買い物は車イス使用者は、上の物、奥の物など取れないから周囲の人に手伝いを頼んで買うが聴覚障害者は、この種のセルフサービスの店舗は非常に楽である。

○出産について

上野さんは、出産時の様子を「産婦人科医が優しく良い人であったことと、手話の出来る看護婦さんが居たことで、安心して出産出来た。ただ、出産時に目をつぶらないようにするのが大変だった。手話が読み取れないから…」と話す。と同時に医療機関での手話の必要を力説。

編集部注・医師、看護婦など医療関係者の手話の必要性について、本紙連載中のTHE DEAF MUTE（旭純子さん）参照

○子育て

上野さんの場合、難聴で少し聞えるので、赤ちゃんを横に寝かせて泣声を感じて起きることができる。全く聞えない聴覚障害者夫婦だけの家庭には、三才児迄「ベビーシグナル」（電機振動板を枕の下に入れる）を福祉事務所より貸してもらえる。が、振動が強くて地震かと思ったり、心臓にこた

お知らせ

〈サロン・あべの〉十一月の出会い

日　時　昭和六十二年十一月十四日
集合午前十時三十分、二時解散

集合場所　阿倍野老人福祉センター玄関前
育徳園の西隣（直接行く人は身障者スポーツセンター玄関前
午前十一時に集合）

行　先　長居スポーツセンター内で自己紹介の後、長居公園散策（雨天のときは同センターで懇談）

内　容　あべのボランティア・ビューロー主催のボランティアスクール受講生との交流会。昼食付き、バスの送迎有り。

会　費　無し

申込み締切日　十月二十七日
人数の都合がありますので、必ずご連絡下さい。

申込み先　電話（〇六）六九一―一〇二八
冨田慶子迄

※十一月のサロンは、第二土曜日。お間違いのないようご参加下さい。

えたりして評判はあまりよくない。

子供の病気の時は、経過を見ていれば大体容態は解るが、ケガ等急を要する時は困る。（重度肢体不自由者の場合も連れていけないので困る。）医院や学校など、手話が通じない時は筆談でするが、難しい話の時は母親か手話の出来る健聴者といっしょに行く。

親が聴覚障害者で、子供が健聴でも〝しつけ〟は他の親がそうであるようにきっちりしておくことが大切。

今まで、学校や友達から親のことでいじめられたことはない。子供（6才）が手話を覚えて、色々と教えてくれるようになってきた。

○社会生活や情報など、聴覚障害者に対する配慮について…。

たとえば電車内に次の駅の字幕を出すようにして欲しい。公的施設や機関、病院、学校等には、ファクシミリの設置と手話通訳者を置いて欲しい。

又、公衆トイレには、大きくはっきりした「入っている」「いない」の表示を出せるようにして欲しい。

地域での情報は、回覧板、管理人、近所の人、友人などから聞くことで足りるが、広範囲のいろいろな種類のは、やはり不足がちである。せめてテレビの字幕は、早急に実現して欲しい。十年前から陳情はされていることはいるが、今もって前進がないのが現実である。

※この記事は、昭和六十二年九月十九日の例会ご出席の方と辻田千陽子さん、上野一美さんとの話し合いをまとめたものです。

（手話通訳は旭純子さん）

――ミニ手話教室――

今日のパネラー辻田さん上野さんに「おはよう」「こんにちわ」を習う。枕をはずす動作をして、つぎに向い合わせた両手の人差指の第二間接を曲げておじぎをする動作で「おはよう」

人差指と中指を重ねて時計の十二時を示し、額から前方へ振り、つぎに、「おはよう」と同じ人差指の動作で「こんにちわ」

……

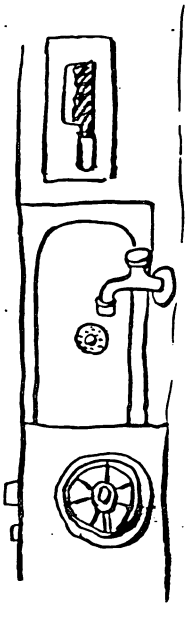
模範自立更生者として

井上憲一氏受賞

＜サロン・あべの＞の運営委員の一人である井上憲一氏が此の度「第二十回記念・全国身体不自由児者父母の会」の全国大会において、「模範自立更生者」として（全国より十名選出、大阪より二名）表彰されました。表彰状と盾、記念品を授与されました。

ヤカンの歎き

冨田　慶子



時間の穴埋めのつもりで、若葉マーク当時の主婦業を話したところ、面白いということで恥ずかしながら～ということになりました。

その当時私は、障害四級で一応手助けなしで、主婦業をまがりなりにもやっていました。が、それまでの生活がマッチ一本すったことも、掃除機を持ったこともなく、食べる人専門だったので、いざ一人で家事をするとなると、解らないことだらけでした。知っていることと、実際に出来るということは、違うことをこの時期に痛切に感じました。そんな生活のある朝、ガスレンジにヤカンをかけて、食卓の支度をして振りかえるとヤカンの裾が赤くなっていました。早朝で暗い台所だったので、ガスの火が映っているぐらいに思ってそのまま他の用をしていました。そして、次に見た時のヤカンは真っ赤になっていました。それでも、その現状が何を意味するのか解らなくボンヤリ見ていましたところ、湯気が出ないで、持柄の所から煙がス～と上っていくのを見て、慌ててガスの栓を切りました。

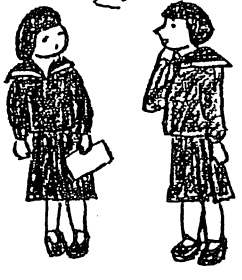
ヤカンはシュンとも言わず、白くなっていきました。冷たくなったヤカンは、はしでつつくと銀紙をやぶくようにプスと穴があきました。私は、ヤカンの空だきをしていたのです。煮物を焦がすことは、知っていても空だきの考えは頭のスミにも入っていなかった私は、〃空だき〃なんて煙が出るまで考えも及びませんでした。

失敗談は、色々ありますが解っていてするのと、全く予備知識なしでするのとでは大違いです。湯の沸く時間を考えに入れておけば、ヤカンが赤くなるまでに変と思うでしょうし、ヤカンが少し赤くなってくれば、空だきと解ったでしょう。つくづくと目の前で見つめていながら、ヤカンの歎きに気がつかなかった私は、主婦業と書けない主婦でありました。（今もそうですが）

今日（9/19）上野さんが話して下さった「気ばたらき」の言葉が身にしみました。

又、何事も経験こそ力と思います。障害者の皆さん、失敗も楽しい体験としてチャレンジ精神を発揮して下さい。

福祉教育の難しさ



仕事がら福祉教育について考えることが多いのですが、福祉教育とは何かという問題は実に難しい内容をもっていると思います。

例えば老人施設の種類や事業の内容を教えるのは簡単なことです。そういうものは記憶力の優れた人ならすぐに憶えてしまうでしょう。福祉の制度や歴史を教えるのが福祉教育であるとするなら、本さえ読めば独学できます。根気よくやれば誰にだってできます。

しかし、どうやら福祉教育というのはそんな単純なものではないようなのです。では、いったい何なのかと尋ねられても、いまの私には答えられませんが、とりあえず福祉教育（特に大学の社会福祉学科の実習教育）で問題になることを事例としていくつか挙げてみましょう。

「事例一」特別養護老人ホームに実習に行った学生。感想を書く実習ノートには、自分のことしか書いていない。オシメをうまく交換できたとか、食事の介助に手間どったとか。老人たちの表情とか気持ちなどはまったく書かれていない。

施設側のワーカーがその理由を尋ねたら、老人たちとは話すことがなかったからだという。たしかにそれほど施設の仕事は忙しい。

しかし問題はそういうことではなく、たとえ老人たちとはほとんど話ができていなくても、「普通の」学生は、老人たちが嬉しそうだったとか、つまらなそうだったとか書くものなのである。

施設のワーカーは「彼女には他人の気持ちを（言葉を交わさないでも）感じるということができないようだ」と言っていた。学生は「他人の気持ちを感じるということがどういうことなのかわかりません」と不満気に言う。

「事例二」精神障害者のディケア・グループに参加していた学生。ワーカーから「あなたは全くグループに溶けこんでいない」と注意される。しかし、彼女は「グループに溶けこむということがどういうことなのかわからない」と言って悩んでいる。

確かに、講義の時間の合間の様子を見ても、彼女は周囲の友達とはあまりしゃべっていない。いつも笑顔を浮かべていて、もの静かで、しかも相当の美人で抜群の秀才であった彼女は、小・中・高校生時代を通して、自分からグループに溶けこむ努力などいままで必要なかったのかもしれない。

「事例三」老人福祉センターで実習をしている学生。ワーカーから「これまで長く生きてきて、沢山の人生経験をもっている人たちなのだから尊敬の気持ちをもって接するように」と言われて、首をかしげている。「長い間生きてきただけで、なぜ尊敬される値打ちがあるのか」と言うのである。「それだったら子供は軽蔑していいのか」と反論してくる。

「事例四」養護施設の卒園生のケアをしている青少年センターで実習をしている学生。「中卒でみんな働いていて、いろいろ悩みごとをぶつけてくるので、煩わしくてしかたがない。同情する気持ちなど全く湧いてこない。彼等は腐った魚のような目をしている」と平然と言う。

「事例五」T大に行けなかったことを入学後半年たっても嘆いている。J大にいることなど恥ずかしくて近所の人にも言えないという。「私はバカだから」と自嘲的に言う。そういいながら「私は精神薄弱者の施設で働きたい」と言っている。そこに何の矛盾も感じていないらしい。

以上、五つの事例を挙げましたが、どれも対応の難しい事例ではないでしょうか。

さて、サロンもまた、地域における重要な福祉教育の場です。教育といっても、教える者と教えられる者が分かれているのではなく、教えあい育てあい学びあう関係がそこにあるということです。それが本来の教育の姿だと思います。

ここに挙げた事例はすべて大学教育の事例ですが、サロンもまた同じような問題に直面しているはずです。試しに、この五つの事例について、どう思うか話しあってみても面白いのではないでしょうか。（知）

旭　純子

2．教育面

両親がろうあ者である場合、子供の教育、育児面での問題が多い。ろうあ家庭の子供は、言葉の発達が遅れがちになるため、幼少時から保育所に入所することが多いが、保母とのコミュニケーションが困難で、保育所での子供の様子をつかみきれないことも多い。PTAの会合、担任との懇談会などでも話合いの内容を把握し理解することができず、日常の父母同士の情報交換にも参加できずに、家庭での指導に悩むことが多い。また、教師や子供の友人など周囲の人々がろうあ者に対して理解が乏しい場合は、子供が精神的負担を負うことになり、親としてそれを感じて苦しんでいる者も多い。

一方、生涯教育体系の整備によって、社会教育システムが充実しつつある現在、ろうあ者の多くは、その恩恵を享受できずに、様々な情報から取り残されることが多い。ろうあ者にとっての情報障害は、彼らの社会生活の範囲を狭める原因ともなり、社会参加を阻害する要因ともなる。情報障害の克服のためには、ろうあ者に対する社会教育の整備がなされる必要があると考えられる。

THE DEAF MUTEについて

河合恵子

THE DEAF MUTEは、今春、学業を終えられ、現在は社会福祉の仕事について活躍しておられる旭　純子さんの卒業論文からの抜粋です。論文ですから堅苦しい文章もありますが、手話通訳に堪能な彼女が聴覚障害をもつ友人たちと接して、実際に感じたこと、考えたことが随所にみられます。

これは連載を始めて第7回になりますが、なるべくその回だけを読まれてもわかっていただけるようにまとめています。これがきっかけとなって、少しでも聴覚障害をもつ方々への理解が深まれば・・・と思います。

軽い気持で応募した府社協福祉広報紙コンクールに思いがけない入選をし、優良賞までいただけたことは、発足して一年余の＜サロン・あべの＞にとって大きな喜びとなりました。この賞をいただけたことは、一重にこれまで、ご支援ご協力下さった皆様方のお力添えの賜物と感謝しております。

＜サロン・あべの＞紙　受賞

冨田慶子

サロン紙の始まりは、会の流れを摑んでいただきたく、前回の報告を手書きで作りそれをコピーしてサロン出席者に読んでいただいていました。その後、石田編集長の尽力で、今日のワープロ印字印刷で冊子形になり、発行部数も増やして、多くの方々に読んでいただけるようになりました。

そして、力だめしのつもりで広報紙コンクールに初応募した＜サロン・あべの＞紙でした。

受賞評に、「＜サロン・あべの＞紙は出会い・ふれあい・助け合い、というテーマどうりの内容と、余白を巧みに生かした余裕をもったレイアウトには感心した。イラストも内容とマッチしてよく生きている。あえていえば、意見とお知らせはあるがニュースがない、という点をぜひ考えていただきたい。とにかく異色の実にユニークな紙面だ。」とありました。

＜サロン・あべの＞の初心を忘れず、障害者の地域参加を目標に、障害者と健常者の接点を軸に「出会い・ふれあい・助け合い」の場作りと、交流の十字路となるべくニュース性を盛り込んだ紙面作りをめざして努力してまいります。

今後とも、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

ありがとうございました。

★年内行事予定

サロン十二月の出会い

「クリスマスの集い」

十二月五日（土）午後一時～五時

育徳コミュニティーセンター研修室。

ボランティア・グループ代表者会議

九月三十日（土）あべのボランティア・ビューローで開かれた、第三回のボランティアグループ代表者会議に出席しました。十二月九日（水）区民ホールにて「第二回阿倍野区ボランティア交流会」を開催予定です。サロン・あべの関係で参加ご希望の方は、十一月四日迄に冨田まで、ご連絡下さい。電話六九一－一〇二八

あっぱしぃれ

今回の受賞に際し多くの方々からお祝い、励まし、喜びのお言葉をいただきました。ありがとうございました。

○機関紙コンクールに入賞されて

時田和明

この度は、「サロン・あべの」が大阪府の主催する機関誌コンクールにおいて、「優良賞」を受賞されたという事を聞き、本当に感心するとともに、改めてお祝い申し上げます。

私たち「応援センター」も、「すたこらさん」を毎月定期発行して８年になるので、その苦労や問題点などが良く解るだけに、「サロン・あべの」の皆さんのご努力と意欲が感じられ、私たちも負けないように頑張っていこうという気持ちになります。

何はともあれ、おめでとうございます。

○お祝のことば

阿倍野区ボランティア連絡協議会
会長　井上範子

昭和六十二年九月二十一日、第十五回福祉広報紙コンクールに御入賞されましたこと、まことに慶賀にたえません。

大阪府社会福祉大会で表彰されましたことは、サロン・あべの運営委員の方々の栄誉たるのみならず、同じ阿倍野に住いする私達の喜びでもあります。

満腔の敬意を表し、心より拍手をもってお祝い申し上げます。

○行間にみえるサロンの性格

あべのボランティア・ビューロー
前田博子

サロン・あべの広報紙「優良賞」おめでとうございます。

Ｂ４一枚の広報紙からスタートし、一年を過ぎたころには、十頁のタブロイド判のりっぱな会誌に成長していました。サロンあべの広報紙の印象といえば、ゆったりとした紙面の端々にのぞくほのぼのとしたさし絵、自由な発想での思いきった段組、それから、何といっても参加した人の言葉や意見なんかが盛り込まれていること。

がちがちのお知らせ新聞ではなく、かといって、投稿で埋めつくされたわけでもない。サロンの主張をちりばめながらも、他からの意見を聞くスペースもきちんと用意している。まさに、サロンそのものの性格が、この新聞にはあらわれていると思います。ふんわりとやわらかくって、人を包みこむような大らかさがあって…。

でも、それはやはり、皆さんの努力の賜物。これからも、ますますの健闘をお祈りして…。

本当におめでとうございました。

○受賞によせて

ファインタウンの会　代表

糀谷　終一

この度〈サロン・あべの〉運営委員会が毎月発行しておられる機関紙〈サロン・あべの〉が、第十五回広報紙コンクールで見事〃優良賞〃に輝かれたこと。本当におめでとうございます。初めてコンクールに応募されての受賞には、他紙にないすばらしい面があったのだと思います。

賞とつくものは、各界にはかなりあります。しかし、その賞を一朝一夕で手にすることは、並み大抵なことではありません。そこには、日々の努力と研さんがなくてはとうてい得られるものではないからです。

審査においては、その機関紙から受けられる内容が読者にどれ程あるのか、また見た目において老若男女問わず、理解され易いかどうか、などなどと審査項目には、かなりきついものがあります。そして、最近の傾向として、人に読ませる機関紙から人に読んでもらえる機関紙作りへと変りつつあります。

〈サロン・あべの〉においても、読む人の立場に立って、より一層のすばらしい機関紙を作って頂き、次回には是非共最優秀賞を勝ち取られることを念じ「受賞によせて」の言葉と致します。

○発刊一年にして　この快挙

セルフ社　井上　憲一

優良賞、おめでとうございます。このコンクールは、回を重ねるごとにレベルが上っていると聞きます。その中にあっての入賞は、ほんとうに立派だと思います。

毎号「サロン・あべの」紙を印刷しているものとして、この上ない誇りを感じます。

今後なお一層、充実した広報紙を発行・編集されますようお祈りします。

編物作品展
ニッティングサロン《友》

ニッティングサロン《友》が阿倍野筋四丁目のフクトク相互銀行阿倍野店で、九月二十八日から十月九日まで、作品展を開いた。会場には、ベスト・ワンピース・バッグ・テーブルセンターなど、メンバー十数人の編物の力作が展示され、銀行を訪れる人々の目を引いた。

この教室の講師＝山本篤江さんは、「日頃からお世話になっている佐本日出子さんのお骨折りで、こんなりっぱな会場をお借りすることが出来ました。そして、辻本支店長はじめ、行員の方々のご理解とご協力で作品展が開くことが出来こんなうれしいことはありません。これからもたのしい作品や力作をどんどん編んでゆきます。」と、感謝と抱負を語った。

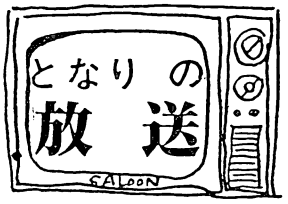
《友》の人たちの力作を背景に…

編集後記

文選泣かせ、植字泣かせ、機械泣かせという言葉があるのを知っていながら、平気で悩ませ、困らせています。みなさま方が陰になり、日なたになり、ご協力いただいたお陰の受賞でした。大阪市内関係の入選三紙の中では、本紙の優良賞が最高ランクのノミネートで、発会して一年半、機関紙発刊一年目での大賞、うれしい限りです。

今日の辻田さん、上野さんの話の中で、意志の疎通がはかれず誤解されイヤな思いをしたというエピソードがありました。改めてコミュニケーションの大切さを痛感しました。

（石）



平和寮のバザー

日時　10月18日１０時～４時

場所　平和寮内盲児施設
（阪南町3-27-2）

内容　バザー、ビデオ上映
マッサージ等

皆様のご参加をお待ちしています。

＜サロン・あべの＞第１６号
発行日　昭和６２年１０月１７日（土）
発行・編集＜サロン・あべの＞運営委員会
［大阪市阿倍野区阪南町6-3-26
電話(06)691-1028冨田慶子］
印刷　セルフ社　電話(06)652-0337